

The Cambridge Gazette

『ケンブリッジ・ガゼット』
ハーバード大学政治経済情報 栗原報告 No. 36
2006年5月号

ハーバード大学
ケネディ・スクール
シニア・フェロー 栗原 潤

今月号の目次

1. ハーバード報告: 最終号
2. ケンブリッジ情報 (1) 全般的情報
3. ケンブリッジ情報 (2) 研究活動紹介
4. ワシントン情報 国際関係
5. 小誌最終号の発行に際して

1. *The Cambridge Gazette* 第36号: ハーバード報告: 最終号

爽やかな春を迎えた本学から小誌最終号を謹んで報告する。創刊の2003年6月号以来、様々な出来事、文献、会議、出張について、また筆者の思いつくままの感想を小誌を通じ綴ってきた。小誌は筆者が世界情勢の把握を目的とする情報収集過程で得たものの一部をケンブリッジ情報として、「内容自体は浅いが広く様々な分野で速やかに読める」ようにまとめて、親しい方々にご報告したいという気持ちから生まれたものである。従って、筆者が日常的に行う、「内容はできるだけ深く、しかし極めて狭く限られた分野で時間をかけて精査」した結果の情報ではない。この意味で過去3年間続いた小誌発行の目的は一応達せられたと判断し、現在の形での *Gazette* は今月号で最後とする。長い間、読みにくい文章及び筆者の独断と偏見を読者に押し付けてきたのかと思うと辛いものがある。さりながら、好意的に受け取って下さる方も多くいらっしや、様々な見方や評価を頂戴することができたのは筆者望外の幸せである。ここに改めて感謝を申し上げたい。さて、今月号は、(1) 筆者が経験した興味深い出来事、(2) 筆者の興味を惹いた研究活動、(3) ワシントン・ボストン情報としての国際関係、(4) 小誌最終号の発行に際して感じたこと、以上4点を報告する。

2. ケンブリッジ情報 (1) 全般的情報

今回、「さまざま」な人と自然環境と題し、筆者が感じたことを報告する。

「さまざま」な人と自然環境

本学で意見交換していると、人間の性格と価値観は本当に「さまざま」だと感じ、アリストテレスの愛弟子、テオプラストスの『人さまざま(*ἠθικοί χαρακτήρες/The Characters*)』のタイトルを思い浮かべている。前号でも書いたが、たとえ同じ現象であっても、人や民族が持つ歴史観や価値観、置かれた状況、そして理解力や創造力により、受け止められ方が大きく異なる。古代ギリシャのプロタゴラスの言葉「人間が万物の尺度(*Πάντων χρημάτων μέτρον ἄνθρωπος/Man is the measure of all things.*)」は確かに正しい。が、尺度である人間自身が、人によって、また同一人物でも時によって「さまざま」であるが故に尺度自体が「さまざま」になる。それでも日本に居る時には大抵の場合或る種の通念さえ心得ていれば良かったが、ここハーバードではそれが通じない。単に奇をてらったものは無視されるが、独創的な見方こそが尊重される。この意味で本学出身の政治学者カール・ドイッチェの名著『サイバネティクスの政治理論(*The Nerves of Government: Models of Political Communication and Control*)』の中の意味深長な言葉「完全に客観的である知識は無い。が、同時に完全に非客観的になり得る知識も無い(No knowledge is completely “objective.” But, ... no knowledge can be completely “non-objective.”)」を思い出している。さて3月18日、サンディエゴの野球場ペトコ・パークがWBC(World Baseball Classic)の日韓戦で熱く

なっていた丁度その日、筆者はサンディエゴからボストンに向って飛んでいた。サンディエゴでは、我が研究センター(M-RCBG)元シニア・フェローで東京大学教授の林良造ご夫妻のお宅(vacation rental)にお邪魔した。そして凍てつくニューイングランドとは異なる生活を楽しみ、暖かい潮風のなか、美しい日没(ニューイングランドでは海辺に出ても日の出しか見ることができない)を眺めつつ、米国内の多様性を感じていた。ご夫妻は到着した日の夜はメキシコ料理店「ラス・オラス」へと、翌日の夜はご自宅で手巻き寿司パーティをと、文字通り大歓待して下さった。寿司パーティには、カリフォルニア大学サンディエゴ校(UCSD)のエリス・クラウス教授ご夫妻も参加されて夜遅くまで東アジアの話題で盛り上がった。また、太陽が水平線に隠れる瞬間を、コクジラ(gray whale)が潮を吹く瞬間を、そして浜辺のレストラン「ポセイドン」でグラスを片手にする一時を楽しんで、同じ米国でも自然環境が東西でこうも違うと考え方や人との接し方も違って来るのかとサンディエゴが育む暖かさを肌で感じていた。更にはジャグジーに入りつつ、サンディエゴの持つ長所(米国東海岸からと日本からの研究者が集い、リラックスしながら議論ができる知的環境)について、また、年に1度はこの場所で、予期せぬ程の「さまざま」な意見を創造的な形で交換する可能性について林氏と語り合った。そして、4年前の2002年、UCSD生活を過ごされていた専修大学の大橋英夫教授ご夫妻とホテル・デル・コロナードの屋外レストランから沖にコクジラの群れを眺めながら飲んでいた白ワインの香りを思い出していた。

3. ケンブリッジ情報 (2) 最近における研究活動の紹介

4月も才能溢れる「ヒト」との情報交換で毎日がアツと言う間に過ぎ、「光陰矢の如し」ならぬ「光陰ミサイルの如し」と感じている。ケンブリッジ情報の第一は4月4日に参加し

た2つの会合である。その第一は、『エコノミスト』誌編集長を辞した直後のビル・エモット氏を迎えた会合である。グラアム・アリソン教授の司会で、15人程の仲間が集いオフレコの会合が開催された。案内には『日はまた沈む(*The Sun Also Sets: the Limits to Japan's Economic Power*)』や『官僚の大罪(*The Bureaucrats' Deadly Sins*)』等が紹介されていたので多数の東洋系参加者を予想したが、豈凶らんや、筆者独りであった。アリソン教授が簡単に紹介した後は質疑応答という形で会合は進行した。興味深いことに質問者の国籍を順に述べれば(i)ブラジル、(ii)チリ、(iii)日本(筆者)、(iv)フランス、(v)米国(アリソン教授)、そして初めて(vi)米国人が3人続き、最後に(vii)旧ユーゴスラビアとなり、本校の国際色の豊かさを改めて感じた次第である。差し障りの無い範囲内での内容紹介で恐縮だが、アリソン教授が「読者に対する啓蒙という視点から留意していることは?」と質問した。これに対してエモット氏は「我々はラテン語を使わないようにしている」と答えたが、筆者はラテン語の諺を含む洒落た表現こそ同誌の真骨頂だと考えていたので思わず噴き出してしまった。第二に紹介するのは、ボストン大学人間科学研究所(IHS)が主催した夕刻の会合(*The EU-US-China Triangle*)である。講師は、駐米欧州連合(EU)委員会代表部のアングロス・パングラティス副代表、ボストン大学のシェリー・ホークス教授、そしてブランダイス大学の沈遠遠(沈远远)教授の3人であった。パングラティス大使は欧米及び欧中のバイラテラルな関係の比較と中国を巡る欧米の相違点を語り、ホークス教授は台湾及び武器輸出の問題に触れ、沈教授は貿易摩擦、特に知的所有権問題を語った。大使の話聞きつつ筆者はヘーゲルの『歴史哲学講義(*Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte/The Philosophy of History*)』の中の言葉「この帝国(中国)は古くから欧州の関心を惹き付けてやみませんでした(*Dieses Reich hat schon früh die Aufmerksamkeit der Europäer auf sich gezogen.*)」を思い浮かべていた。質疑応答時、筆者は国家

統計局局長(国家统计局局長)の李徳水氏が語る「悪意の M&A(悪意并购)」(小誌前号参照)、エモット氏が関わった最後の『エコノミスト』誌(3月30日号)の「白禍論(The white peril)」、そして米中欧の全域で高まる経済的ナショナリズムに関する大使の見解を伺った。まことに三者間関係は複雑である。そして昨年ポーランドがドイツの輸出先として中国を抜いたと報じた4月10日付独経済専門誌『ヴィルトンシャフツ・ヴォッヘ』の記事を読んでいる。

3月24日、ハン・ミョンスク(韓明淑/한명숙)女史が韓国首相候補に指名された。その直前、本校は政治関連の女性専門プログラム設立のため150万ドルの寄付を受けたことを発表した。現在連邦議会における女性の割合は上院で14%、下院で15.4%であるが、同プログラムが男性優位の政界に将来如何なる形で影響を与えて行くのか興味津々である。幸運にも、筆者の知る女性は素晴らしい個性と才能の持ち主ばかりである。筆者が恩師と仰ぐマサチューセッツ工科大学(MIT)のスザンヌ・バーガー教授は知性と品性に優れた尊敬すべき「ヒト」である。また最近スポーツの世界でも日本女性の活躍が目立つと感じているのは筆者だけではあるまい。嘗て岩波文庫で読んだ宣教師ルイス・フロイスの『日欧文化比較』には、「ヨーロッパでは夫が前、妻が後になって歩く。日本では夫が後、妻が前を歩く」や「われわれの間では女性が文字を書くことはあまり普及していない。日本の高貴な女性は、それを知らなければ価値が下がると考えている」という記述がある。人口減少期の日本にとって、職場と家庭共に大活躍が期待されるのは戦国時代に闊歩していたような逞しい女性であり、そう考えれば将来は大変明るい。

次に日本に関連した一連の会合を紹介する。①4月6~7日、関西経済同友会と本校が第13回目のシンポジウムを共催した。代表幹事の松下正幸松下電器産業副会長及び森下俊三西日本電信電話社長を筆頭に、萩尾千里関西経済同友会事務局長や岡野幸義ダイキン工

業社長等の財界を代表する方々、本校からはデイヴィッド・エルウッド校長やM-RCBG所長のジョン・ラギー教授を筆頭に、ジョセフ・ナイ、ディル・ジョルゲンソン、ロジャー・ポーター等錚々たる本校教授が参加された会合であった。加えてパットナム・インベストメンツのオフィスで行われたフィデリティ等コーポレート・ガバナンスの専門家達との日米のSOX法等に関して熱のこもった意見交換も非常に参考になった。②4月12~13日、尊敬するジェトロの塚本弘副理事長がボストンを訪れて日本及びアジアの経済動向について最新情報を語られた。本校ではアジアのFTAに関する論文を現在執筆中のロバート・ローレンス教授が鋭い質問をされて会合が活気付き、12日の夕食時はアンソニー・セイチ教授と日中関係に関する話をグラス片手に楽しんだ。MITではリチャード・レスター教授の司会で科学技術分野に関する会合が開催された。③来たる5月4~6日、本学のジョン・ミルズ氏による綿密な準備のお蔭でアジアの優れた人々が集まりオフレコで本音を語り合う「アジア・ヴィジョン21(AV21)」が開催される。日本からは林芳正参議院議員、堀井昭成日本銀行国際局長、伊藤隆敏東京大学教授等が参加される予定で筆者自身楽しみである。④Easter Monday(ボストンでは、Patriots' Day)の4月17日、ワシントンDCに在る戦略国際問題研究所(CSIS)で、三菱東京UFJ銀行の竹中正治氏と共に講演を行った。「竹中=栗原コンビ」のCSIS講演はこれが4回目で、司会役のマイケル・グリーン氏から「年内にもう1回講演を」と頼まれたことが嬉しい。が、筆者にとり唯一残念なことは東京に戻られたために住友商事総合研究所の足立正彦氏を聴衆のなかに発見できなかったことである。足立氏は米国政治を中心とする幅広い知識をお持ちの方でいつも小誌について有益なコメントを下さり、学ぶところが多く深く感謝している。さて、久しぶりのDC滞在では、Easter Sundayの夜、ジョージ・ワシントン大学(GWU)のヘンリー・ナウ教授邸に泊まり、最近の日米中関係に関して意見を交わした。

ケンブリッジ情報の第四として、本学関係者の発表した小論を簡単に紹介する。それらは、①本校のペパー・カルペパー教授と本校欧州問題研究所(CES)所長のピーター・ホール教授が3月29日付『インターナショナル・ヘラルド・トリビューン(IHT)』紙に、フランスの雇用政策(*le contrat première embauche (CPE)*)を巡る混乱に関する小論「友愛の失敗(*The Failure of Fraternité*)」、②アマルティア・セン教授が『フォーリン・アフェアーズ』誌3/4月号に掲載した書評「計画性無き人間(*The Man Without a Plan*)」(対象の本はニューヨーク大学のウィリアム・イースタリー教授が3月に出版した『白人の重荷: 西側諸国による援助における過大なる害悪と過小なる利益(*The White Man's Burden: Why the West's Efforts to Aid the Rest Have Done So Much Ill and So Little Good*)」、③本校のステイーヴン・ウォルト教授とシカゴ大学のジョン・ミアシャイマー教授がユダヤ・ロビーの米国政治に対する影響に関して3月23日付『ロンドン・レビュー・オブ・ブックス(LRB)』誌に発表した小論「イスラエル・ロビー(*The Israel Lobby*)」、以上3つである。①を著したカルペパー教授は欧米のコーポレート・ガバナンスに関する研究を終え現在日本の状況に関心を持たれている。ホール教授は昨年末CESの玄関で偶然出会い言葉を交わした時、葉巻を吸われていた教授に向かって思わず「喫煙はお体に毒ですよ」と申し上げようとしたが、小心者の筆者は尊敬する同教授のご機嫌を損ねてはいけないと思い微笑みながらの雑談だけに終わったことを告白する。②はノーベル賞受賞作家キップリングが1899年、フィリピン植民地政策に関して発表した詩の題名になぞらえた本について、ノーベル経済学賞受賞の碩学が著した書評である。③は米国内で一大論争となった小論である。その大論争に関してエルウッド校長が我々本学関係者に送ったメールを読みながら、事前検閲の不必要性を唱えて権力と戦い、『アレオパジティカ(*Areopagitica*)』を著した17世紀の英国詩人ジョン・ミルトンの勇気ある言動を思い出していた。

ケンブリッジ情報の最後として、昨年2月、中国東北部で実施した実態調査に触れる。その時の報告書が1年を経て大連(大連)市政府の目にとり多数の電子メールを頂き驚くと共に喜んでいる。メールのやりとりを通じてグローバリゼーションの進展を感じつつ、現地事情に詳しい大連の方々と筆者のような人間との協力・補完関係のありがたさを噛み締めている。現地調査の際、日本大使館勤務(当時)の荒井崇氏をはじめ多くの優れた方々からの協力を得た。こうした方々のお蔭で大連の人が喜んだ資料ができたのだと改めて感謝している。昨年、大連の日本料理店で筆者は情報を提供して下さった方々を前に、「今回の現地調査ほど、人々との間の協力・補完関係のありがたさを感じたものはない。私は日本で多くの電子部品産業に携わる企業の方々、業界の専門家と意見交換をした。しかし、そうした専門家の知識だけでは、中国東北部の特殊事情を勘案した形の報告書はできない。この意味で専門家の役割と各地の事情通の役割が重なり合うところに優れたものが生まれると痛切に感じた」と語った。専門家は当該分野の事象を体系化・法則化しようとし、国際共通語(英語)で世界中の専門家同士の間で情報交換をする。一方、事情通は限られた領域ではあるが、或る事柄や或る地域に関して微に入り細にうがう形で事情に通じている。そして専門家が質問すると、「ははん、あのことか」と瞬時に理解して、専門家に特定の事情に関して理解し易く説明する。こうした国際志向・体系化志向の専門家と特定の事項・地域にこだわりを抱く事情通との間でのコミュニケーションは極めて重要である。グローバリゼーションが進展する現在、一人ですべての情報を収集かつ理解することは不可能である。小誌2003年10月号で敬愛するプリンストン大学のアビナッシュ・ディキシット教授の言葉(“*monitor locally, communicate and trade globally*”)を引用した。筆者も特定の事象や分野を追いながらも、それらの持つ世界的な意義・位置を考え、そしてケンブリッジで観察しつつ世界の人々と交信したい。

4. ワシントン情報 国際関係

世界の報道を追っていると、「過去の悲劇」が「将来の悲劇」を生まないようにと願う単純思考の筆者の思いを裏切るかの様な出来事が続いている。が、海音寺潮五郎・司馬遼太郎対談録『日本歴史を点検する』には、250年以上抱き続けた佐竹藩(秋田)の「関ヶ原の恨み」と戊辰戦争時の同藩の行動が紹介されている。確かに、世の中、「恩讐の彼方に」と簡単に事が片づく訳がないのは当然であろう。そう考えつつも謙虚さの大切さを説いた『史記』にある「虞芮之訴(グゼイの訴え)」を思い浮かべている。まことに世の中は複雑怪奇で不可思議である。加えて情報源のマスコミ報道には質的なばらつきが有るが故に情報の真偽を確認しつつ行動しなくてはならない。本学の教授やフランス政府高官とマスコミ情報の質につき以前議論したことがある。教授は『ル・モンド』紙の経済欄の不正確さを指摘すると同時にそれを筆者が読んでいると知って驚かれた。筆者はそれに対して「確かに不正確かも知れませんが、ドゥ・ヴィルパン首相は同紙を読みつつ政策決定をされていますから無視できません」と申し上げた。また、イスラム系若年層の騒動に関し、仏国政府高官は米英系マスコミの偏った報道を厳しく批判していた。こうして筆者は「複眼的観察」の重要性を改めて痛感している。

ジャック・シラク仏大統領が、3月24日、フランス財界首脳が英語で演説したことに怒りを表しEUの或る会合から退場したと知って驚いている。欧州財界の共通語(the *lingua franca*)は英語だが、英語に堪能な仏大統領はご不満らしい。同国を代表するビジネス・スクール(INSEAD)では英語で授業が行われ、非英語圏で最大の『エコノミスト』誌販売部数を誇るのがフランスだというのに仏大統領はフランスらしくない優雅さを欠く行動をどうして採ったのだろうか。脱線で恐縮だが、MOFと言え日本では財務省を指すが、グルメ仲間の間では名誉あるフランス最優秀料理

人賞(Meilleur Ouvrier de France)を指し、尊敬する故辻静雄氏も授与されている。辻氏が兄貴分と慕ったフランス料理の大御所、ポール・ボキューズ氏は、「マクドナルド」のミルク・シェイクが大好きで、また「フランスでは良いレストランであっても料理を作るのに他の店から出来合いのものを使うのか」という問いに対して、「一人のシェフがなにかも手をつけてやろうとするのは間違っており、自分自身が一番よくできるというものだけに神経を集中すること」と答えている。すなわち、この名シェフは(a)米国にだって探せば美味しい食べ物があること、(b)分業と特化、そして“outsourcing”の重要性を正確に認識している。これを知って筆者は感心し、フランス料理の国際競争力を再確認した次第である。フランス語はグローバル・ビジネスで使われなくても料理や芸術では必須言語であり、デニス・エンカーネーション教授をはじめ、仏語を学ぶ米国教養人の家庭は依然として多い。また英国のオスカー・ワイルドは戯曲『サロメ(Salomé)』を仏語で書き、フランスのヴォルテールは『哲学書簡(Letters Concerning the English Nation)』を英語で最初に著した。更には日本人が好むベートーヴェンの『第九』を日本語で歌っては興醒めであることは言を待たない。そして柔道や真珠等では日本語が the *lingua franca* であり、匁(momme/mon.)は真珠の世界では重要な単位である。こう考えれば重要なことは或る分野に関してどの言語が必須であるかを正確に把握することではないだろうか。カリフォルニアの或るベンチャー・キャピタリストから「機密事項と守秘義務の関係からヒソヒソ話で行われる投資家間の会合で、デジタル・レコーダを平然と置く日本人に困惑している」という話を聞いた。筆者は中学生時代に吹き替え版『ローマの休日(Roman Holiday)』に感動すると共に、「オードリー・ヘップバーンが日本語を話す訳がない」と疑い、映画界の the *lingua franca* は英語と直感し、英語だけは真面目に学んだ。そして今、シラク大統領と日本のビジネスマンの「場違いの行動」に当惑と不安を感じている。

5. 小誌最終号の発行に際して

これまで36回にわたり、*Cambridge Gazette*と題し、ケンブリッジに関する情報を読者に届けてきた。当然のこととはいえ、自らの限られた力から本学の魅力の極めて僅かな部分しかお伝えできなかったのが残念である。しかし、親しい方々に小誌をお送りし、「問題児の栗原は、無事にしかも元気に生きている」ことを伝えられたのは筆者にとって大きな喜びであった。同時に筆者の意見に必ずしも賛成できないとしても、多くの方々が「一つの見方」として暖かく受けとめて下さったことに深く感謝している。さて最終号を閉じるに当たり、将来ケンブリッジで学ぼうとされる若くて有能な人々を念頭にして、過去3年間、筆者が感じたこと、7点を以下にまとめてみた。すなわち、①我々の「常識」をグローバルな視点から再評価すること、②国籍にかかわらず輝く才能の「ヒト」の素晴らしさ、③日本人だと認識すること、④正確かつ合目的な情報・知識を得ること、⑤「先知(事前情報)」の意義、⑥コミュニケーションの重要性、そして、⑦才能ある「ヒト」との協調・協力と彼等との「仲間意識」の重要性、以上である。

①「常識」について: 本学では自らが「常識」と思い込んでいる事柄が、往々にしてグローバルな視点からすれば「非常識」、或いは「特殊例」だと指摘される事態に頻繁に遭遇する。ケンブリッジの知的社会は、当然のこととして様々な専門分野、国籍、価値観、宗教観を持つ人々から構成される。こうした人々と言葉を交わす時、自らが「常識」と信じていたことや理解しているつもりと錯覚していたことが通用しない事態、或いは「何故常識であるのか」を説明する事態に遭遇する。そのたびに、偉大な考古学者であるシュリーマンの著作(昨年12月号参照)の中の言葉「或る民族の道德性を他の民族のそれと比べて云々するのは極めて難しい(*Il est fort difficile d'exprimer une opinion sur la moralité d'un peuple comparée à celle d'un autre.*)」に、更に

はクセジュ文庫(昨年11月号参照)の中の言葉「非礼中の非礼は、自分の国の習慣こそは最高の作法であり、他国の習慣は問題にならぬとする態度そのものである(*La pire des mauvaises manières c'est d'imaginer que les bonnes manières sont celles de ton pays et les mauvaises celles de l'étranger.*)」に共感を覚えている。こうした「常識」と「常識」との対立に際して、我々は、(a)どうせ分かり合えないと諦めて互いの意見交換を停止するか、(b)互いの「常識」に橋渡しをする手がかりを見出し、意見交換を通じて互いに新たな知見を生み出す努力をするかの二者択一を迫られる。

②輝く才能の「ヒト」について: 筆者は、小誌を通じて素晴らしい人々との会話や研究業績を紹介してきた。過去3年間、「世の中には信じられない程の凄いヒトがいるものだ」と感心し、知的刺激に満ちた毎日であったと言っても過言ではない。大抵の場合、こうした「ヒト」達は、謙虚であると同時に寸暇を惜しんで自らの努力を怠らない方々である。従って、彼等と情報交換するには自らの能力を高めない限り、彼等は「本気」で、すなわち、身を乗り出して語ってくれることはない。そうでないと、微笑みながら品良くあっさりとして軽くあしらわれるだけである。この意味で、浅学非才の筆者ではあるが、等身大の努力までも放棄することになれば、ここでは誰も相手にしてくれなくなると、不断の努力の重要性を毎日のように感じている次第である。

③日本人であることについて: 当然の話ではあるが、世界に出て初めて自分が紛れも無い日本人であることを体感する。少々派手な言い方をすれば、日本から出て初めて自分が日本に生まれたことを実感し、その結果として愛国主義者になる確率が高くなる。かくして本学で筆者は自らが熱烈な愛国主義者であることを発見した。と同時に、ここにいると、外国の人々も自分の国を誇りとしていることを実感する。米国人、英国人、フランス人、そして隣国である中国人や韓国人…。こ

うして、本学で日本に誇りを感じ、日本を更に良くしたいと感じる一方で、外国の優れた「ヒト」も、自らの国の将来のために努力していることを知ることができる。同時に、無知から派生する形で外国人が懐く「嫌日・反日」や日本に対する無関心の恐ろしさも痛感した。そしてナショナリスト的な、またヒステリックな「嫌米・反米」、「嫌中・反中」、「嫌韓・反韓」、また、現在米国社会に高まる「反イスラム感情 (Islamophobia)」、「反中感情 (Sinophobia/反华情緒)」、更にはヒスパニック系不法移民に対する感情的拒絶のもつ危険性を痛感している。コスモポリタンの愛国主義者を自負する筆者は今、昭和天皇が詠まれたことでも有名な明治天皇御製の「四方の海/みな同朋(はらから)と/ 思う世に/ など波風の/ 立ちさわぐらん」を思い出している。

④情報・知識について: 情報・知識の正確性と合目的性は重視し過ぎることはない。情報発信者の理解力、意図、表現力により、情報の正確性は大きく変化する。例えば、国際関係の知識の浅い人が、悪意に満ちた形で、それも煽動家 (rabble-rouser) として振る舞えば、国民の知的水準が相当高くとも、民主政治 (democracy) が衆愚政治 (ochlocracy) へと容易に墮する危険性は歴史の示すところである。この意味で、尊敬する新渡戸稲造博士が『自警録』の中で述べた言葉「一時の快を貪る極めて短慮な者には、内容のない雄弁を揮(ふる)ってみたり、あるいは大声一喝(タイセイイッカツ)、相手の人には痛くもない讒謗(ザンボウ)や冷評を浴びせかけて、ドラマチックに喝采を受けて嬉しがるは我が国民の一弱点」を思い出し、自らの戒めとしている。また合目的でない情報は情報自体どれほど魅力的であってもほとんど無価値に等しい。当然のことであるが正確・的確な情報は収集・選別が非常に難しい。これは情報交換の性質とプロセスに起因している。外交交渉や企業戦略では、「手の内」を見せることが戦術的失敗を引き起こす可能性がある。従って、「透明性」・「説明責任」が叫ばれている現在でも、

政治的・経営的に情報開示内容を戦略的に制限したり、時期的に遅らせたりすることは日常的に行われている。また相手の情報収集活動や意思決定を混乱させるため、故意に行う情報操作 (disinformation や strategic ambiguity) もあって、その戦術的有効性を研究することも厳しい国際社会のなかで「生き抜くワザ」として決して軽視してはならない。

⑤「先知」について: 本学は、政策担当者や企業家等、プラクティショナーが頻繁に訪れる場所である。彼等は意思決定が下される以前、すなわち事前に様々な選択肢を再検討するため、また実践過程における修正可能な選択肢を検討することを目的として本学を訪れる。この意味で、本学では各種の事前情報が様々な形で交換されていると言っても過言ではない。『孫子』の「用間篇」に、「明君賢將の動きて人に勝ち、成功すること衆に出づるゆえんのは、先に知ればなり(明君賢將が軍を動かすと成功をおさめるその理由は事前情報を有している、すなわち、『先知』にある、との意)」という一節がある。嘗て大陸軍総司令官としてケンブリッジで過ごした経験を持つジョージ・ワシントン大統領は、独立戦争中、軍費の1割以上を敵情把握に割いた。これは、米国では the French and Indian War と呼ばれる英仏間の戦争(1754~1763)で、若き日の同大統領が英国軍将校として従軍した時、英国のエドワード・ブラッドドック将軍が敵情をまったく無視したために奇襲を受け大敗を喫するという苦い経験があったためである。こうしてみると、ワシントン司令官は、『孫子』が説く「爵禄百金を愛(おし)みて敵の情を知らざる者は、不仁の至りなり(恩賞や費用を出し惜しみ敵情を知ろうとしない者は、人の上に立つ将としての資格は無い)」という教えを忠実に実行した優れたリーダーと言えよう。このように情報はタイミング良く、しかも望むらくは事前に入手することが肝要であることを意味する。勿論、すべての事象が予見できる訳ではないし、事前情報が確実に収集できる訳ではない。とは言え、「備え有れば

憂い無し」であって、極めて稀な幸運を除けば「備え無ければ憂いだらけ」であろう。事前情報入手の秘訣を『孫子』に尋ねると、「必ず人に取りて敵の情を知る者なり(必ず『ヒト』を使って敵情を知ること、の意)」とある。情報の価値を識別できる有能な「ヒト」を使って情報収集しなければ有益な情報収集は不可能であることは今や明白であろう。

⑥コミュニケーションについて: 正確かつ合目的で、タイミング良く情報・知識を検索・選別するためには、すなわち、価値ある情報・知識を入手するには、優れた「ヒト」との双方向・継続的・重層的なコミュニケーションが不可欠である。以前、筆者は小論「情報と価値」を書いたことがある。その中で、情報交換に関して、「タイミング、内容(正確性・客観性、先見性、独創性)、そして伝達媒体(目(絵・文章)、耳と口(音・味)、体(体験)の違いやメディアの違い)」によって、情報の価値や情報伝達の効率性が変わってくることを述べた。結局のところ、情報の価値は発信・受信双方のキャッチボールを通して発現される。従って、自ら考案した経済理論がどんなに魅力的であっても天文学者を相手に説明するとしたなら、或いはどんなに熱のこもったラブ・レターであっても病の床に伏せている恋人の傍で読んで聞かせるとしたなら、しかもそれらがサンسكريット語で長々と書かれたとしたなら、ノーベル経済学賞も、囁き合える口元の可愛い恋人も手中にすることはできない。更には情報交換をする仲間が、情報交換の目的、収集情報の内容・質・タイミングについて理解していない限り、情報伝達は予期せぬところで途絶えてしまう危険性が存在する。この意味で、双方向・継続的・重層的なコミュニケーションの重要性は強調し過ぎることはない。また、我々が発信しない限り、相手は発信してこない。そして我々が発信する内容・質・タイミングに合わせて相手も我々に発信してくるのが情報交換のルールである。

⑦協調・協力の精神について: 本学は様々

な分野の人々—研究者だけでなく、政治家、企業家、社会活動家やジャーナリスト等、実践に携わる人々と意見交換をする機会に溢れている。と同時に、たとえどんなに優れた「ヒト」でも、「一個人では何もできない」ことを実感する。そして、互いに尊敬と謙譲の姿勢、そして協調と協力の精神がなければ、優れた研究や公共政策・経営戦略は生まれてこないと確信している。この意味で、“Harvard buddies”という「仲間意識」(昨年12月号参照)のグローバルな広がりを感じている。百年以上も前、本学ロー・スクール(HLS)出身の金子堅太郎伯爵は、日露戦争時、本学出身のセオドア・ルーズヴェルト大統領等と密かに終戦への過程とその条件を打ち合わせた(3月号参照)。金子伯は「旧友を外務大臣に持ち、又海軍大臣に持っていったのは、非常に私には大きな力であったのです。このとき私は外交はいかに日本で偉い人でも、その使命を持って行く外国に友達がなかったならばけっしてうまくいかないということをつくづく感じた。友達がなくて素手で外国に行って雄弁を揮って、僕は日本では元老だ、大臣だと言っていばって見たところが三文の値打ちもない。真に頼るところのものはその国の親友であるということを感じた」と述懐している。御前会議で対露戦が決定された夜、伊藤博文枢密院議長は金子伯を自宅に呼び、直ちに第三国である米国に渡って世論操作と対露交渉の準備をするよう指示した。こうして金子伯の“Harvard networks”の貢献もあって、国力の限界に近づいていた大日本帝国は勝利と平和を享受することができた。これと対照的なのが太平洋戦争である。『古風庵回顧録』(2004年9月号参照)で、若槻禮次郎元首相は、「東條に対して、政府はしきりに『英米撃滅』を唱えて国民を激励しているが、英米を撃滅するには、わが軍がロンドン又はワシントンに乗り込んで、彼をして城下の盟をなさしめることである。制海権、制空権を持たないで、どうしてかくの如きことが出来るのか。元来私は、今回の戦争は勝負なしで終れば上々であると考えている。勝負なしの

戦争ということであれば、これは永引かしちやいかん。なるべく速に平和を回復することを心がけなければならん筈だ。それには平和回復の緒を見つけることが大事だ。緒の発見は、多くは誠に小さな偶然のことからはじまるのである。それ故バチカンまたはマドリードというような、対戦国人も行けば、中立国人も自由に往来し得る、全く戦争に関係のない所へ、わが国からも何等肩書を持たない、しかも有能な人物を派遣して置いて、その交遊する人々を通じて、わが国の空気を吹き込み、相手方の空気をも吸い取る。何かの話の間に、ポイと機会を捕える。兎に角こうして何等かの端緒を掴むことを試みなくてはならない」と述べている。続けて「東條はこれに答えて『それはその通りだが、今日となつてはすでに交通が杜絶し、策の施しようがない』と苦笑しておった」と述べている。日露戦争後の大日本帝国の国際感覚と戦略的思考の欠如に驚いているのは筆者だけではあるまい。

上記7つの助言は筆者にとっても自戒とするもので、有能で若い方々が筆者以上にケンブリッジで多くのことを学ぶ時に参考になればと願いつつ記した。さて、4月後半に入り、花咲き誇る春は人々の心を暖かくさせる。故国日本も新緑の季節が深まっているであろう。京都嵐山には、1919年4月、若き日の周恩来総理が日本留学中に詠んだ歌の記念碑がある。そこには「人間的万象真理、愈求愈模糊/ 模糊中偶然見着一点光明、真愈觉娇妍(人間世界のあらゆる真理は求めるほどにあやふやになる。が、そのなかに偶然一点の光明を見出せば、真にいよいよ麗しい、の意)」という言葉が刻まれている。この言葉を M-RCBG に所蔵される中国政府寄贈の同総理の伝記を読みつつ思い出している。筆者も本学で学べば学ぶ程、世の中と学問の難しさを一層感じているのが本音である。本学ではタイタニック号と縁の深いワイドナー図書館をはじめアンドーヴァー神学部図書館、燕京図書館、ラモント図書館等から興味深い書籍や CD、更には DVD を借りて楽しんでいる。そして、研究の

合間に一度は読みたいと思っていた書物を手にする機会に恵まれた。愛読書『きけわだつみのこえ』にも出てくる『ドイツ戦没学生の手紙(Kriegsbriefe deutscher Studenten)』や『モーツァルト書簡集(Mozarts Briefe)』の原書、『ルバイヤート(رباعيات خيام) The Rubáiyát of Omar Khayyám』の英語・ペルシア語併記版、更には太平洋戦争に関して、総力戦研究所の関連資料、佐藤賢了帝国陸軍中將による『東條英機と太平洋戦争』、井上成美帝国海軍大将による「新軍備計画論」、そして1944年、『毎日新聞』紙上で「竹槍では勝てない」と論じた記者、新名丈夫氏編集の『海軍戦争検討会議事録』等を読むことができた。こうして井上提督の先見性に改めて驚くと共に、1920年代にはレーダー技術に関する商談が既にありながら不採用とした帝国陸海軍、1943年には米国が「革命的新兵器」を開発中と駐在武官から詳細な報告を受けておりながら、1944年2月、貴族院本会議における田中館愛橘博士の原子爆弾に関する質問に対して東條首相が行った「世界にその比を見ざる日本刀を産する、わが国科学技術の偉大なる力」という答弁等を初めて知り、様々な意味で考えさせられた。こうして筆者は、正確性・合目的性・タイミングを考えた情報・知識の把握と双方向・継続的・重層的なコミュニケーションの重要性を痛切に感じている次第である。

このように本学で研究の合間に考えたことは、「日本人として、或いは人間として如何に生きるべきか」という極めて基本的な問題であった。その意味で、本学で西田哲学や田辺哲学、更には新渡戸博士の『武士道(Bushido, The Soul of Japan)』や石田梅岩の『都鄙問答』・『儉約齐家論』を再び学ぶことができた喜びは大きい。前述した金子伯の『日露戦争・日米外交秘録』には、ホワイトハウスに畳や柔道着を取り寄せ、『武士道』を30部購入して日本ファンになったルーズヴェルト大統領やオリヴァー・ホームズ連邦最高裁判事との興味深い会話が紹介されている。同大統領は、ドイツ大使が官邸を訪れて、日露戦争で勝利

すれば日本はアジアにおいて欧米諸国の勢力と対立し、ドイツは青島の租借地を、米国もフィリピンを将来日本に取られる危険性があると述べた事を伝えた。これに対し金子伯は「日本には武士道があるから決して他国の既得権たる青島なりフィリピンなりを取るという心配はない」と答えている。また、ホームズ判事はギリシャ、ローマ、そしてスペインやポルトガルという西洋の嘗ての大国の命運に言及し、柔弱に流れて国が衰退する危険性を語り、日本武士道の将来を金子伯に尋ねている。確かに日本では「花は桜、人は武士」と言う如く samurai の精神は人の心を打つ。敗戦後の今村均帝国陸軍大将の行動を知ったマッカーサー司令官は「真の武士道」に触れた思いをしたという。一方、ヘーゲルは『歴史哲学講義』の中で、「スペインでは騎士道が最高度に美しく高貴な形をとっていました。この騎士道の偉大さがいまや実体なき名譽になりさがり…(In Spanien hatte Rittergeist eine höchst schöne und edle Gestalt gehabt. Dieser Rittergeist, diese Rittergröße, zu einer tatlosen Ehre herabgesunk …)」と手厳しい。その約百年後、母国の命運に義憤を感じ、『大衆の反逆 (La rebelión de las masas/The Revolt of the Masses)』を著した哲人オルテガは、『無脊椎のスペイン (España invertebrada/Invertebrate Spain)』の中で、少数だが(脊椎の如き)「ノーブレス・オブリージュ(noblesse oblige)」の精神を持った「ヒト」を欠けば社会は機能しないと説いている。こう考えると新しい成長軌道の出発点に立つ我が国も、noblesse oblige を心に秘めて自らの行動を省み、そして新たな道を探る指導者の努力が必要なのであろう。

本学は東西の叡智が交わり、その実践方法を模索する場所の一つである。そしてこの場で過ごす時間を持たた幸運に感謝している。先日も『論語』の話が出た時、筆者は孔子没年とされる紀元前 479 年に行われたプラタイアの戦いを思い出していた。敗戦を予期したペルシア人は「最も辛いことは、多くを知らながら行動できないことである(Εχθιστή δέ

όδύνη ἐστὶ τῶν ἐν ἀνθρώποισι αὐτῇ, πολλὰ φρονέοντα μηδενός κρατέειν./The worst pain a man can have is to have much knowledge but no power.)」と嘆いたが、確かに智慧がいくら優れていても、実践なくしては智慧も生きまい。こうしたことを考えることができるのも本学の友人に加えて物心両面で支えて下さる田口佳史先生のお蔭と感謝している。そして先生とお話していると様々な形でわだかまりが消えてゆく喜びを感じる。先生は杉並区の山田宏区長と共に教員の再教育機関「師範塾」を設立された。このたび先生と共に東京に「東西の知の融合研究所」を設立し活動を開始することとなり大変喜んでいる。田口先生を紹介して下さった方は日本改革に関して「戦友」とも呼ぶべき日本銀行の瀬口清之氏である。現在、同氏は北京で日中間の重要な役割を果たされており、同氏の活躍を心から祈っている。そして瀬口氏を紹介して下さった方は、日本銀行の福井俊彦総裁である。お忙しいなか、福井総裁は筆者の話聞いて下さり、表現する言葉も思い浮かばない程感謝している。残念ながら福井総裁にご恩返しをする能力に恵まれない筆者だが、福井総裁に対する感謝の気持ちを常に懐き、若い人々のために有形・無形のプラスの遺産を築くよう努力を重ねて行きたい。さて、ヴォルテールは我々に「人を退屈させる秘訣はすべてを語ることである(Le secret d'ennuyer est celui de tout dire.)」と教えてくれる。筆者はすべてを語った訳ではないが、過去 3 年にわたって多くを語り過ぎたと感じている。この辺で暫く沈黙思考して新たな行動の準備にとりかかることにする。最後に読者の忍耐と寛容に改めて深謝する。

以上

編集責任者	
栗原 潤	Jun KURIHARA
ハーバード大学	Senior Fellow,
ケネディ・スクール	John F. Kennedy School of Government,
シニア・フェロー	Harvard University
連絡先	
Mailing address:	79 JFK St., M-RCBG, Cambridge, MA 02138
Office address:	124 Mt. Auburn, Cambridge, MA 02138
Tel:	+1-617-384-7430; Fax: +1-617-495-4948
Email:	Jun_Kurihara@ksg.harvard.edu; JunKuri@aol.com